

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

◎平成二十三年一月二十二日(第四回)

(佐藤 紀之)

一陣の 風が路面を 這うごとく 雪を踊らす 銀板の夜
雪雲の うえ陽は昇り 空は澄む 常なる心 そう願いたし
白妙の 雪をまといし 南天の 赤い実揺らす ひよどりの影
天地を ずんと貫く 蔵王岳 さし向かい見ゆ 朝の湯舟で

(佐藤 亮照)

降り続く 堂庭の雪 掃きければ 長靴に入る 雪の冷たさ
凍りつき 水栓への湯 動き始め ホットしにけり 寒中の朝
仏飯を ついばむ姿 ありがたし 石灯笼の 小鳥の家族

(松田 昌泰)

淡雪を 味方に入れて さざん花は 庭光照らす かがり火の如く
帰り際 冷たい雨も 氣にならず 今日もうれしや 一座建立
初詣 ツルツル階段 足とられ 願いはひとつ 家内安全

(黒沼 貞志)

年の瀬の 買物ひとつの いさかいに 小さく誓って 聴く除夜の鐘
むち打ちで 通うりハビリ 垣間見る われも一人か 多老化社会
おはようと 小さき隊列 返す声 吐く息白き 朝すがすがし
毎朝の 雪はきひとつ 家の貌 たかがとされど 行きかう心

(中村 昌平)

「大雪の朝詠める二首」

眠けきり 雪積もる中 愛犬と 沈む足見て 雪除け憂う
ため息に 腕引く犬を 見て思う 「自分も元氣 出して行こうか!」